

お笑いの原点と大切にしたい古きよきもの

お笑い芸人「笑い飯」てつおさんへのインタビュー

てつおさんは、奈良県出身の漫才コンビ「笑い飯」の一人です。本誌のインタビュアーとは、高校時代の同級生でともにサッカー部に所属していました。彼は高校時代、部活のサッカーでは全く目立たない存在でしたが、人を笑かすことには当時からかなりのこだわりをもっていて、芸人になる前から周囲を笑わせていました。そんな彼について、自分が知っている彼と「お笑い芸人てつお」がどのように結びついているのか、人を笑わせるという作業の原動力が何なのか知りたくて、今回、インタビューをお願いしたところ、快く引き受けてくれました。



自分が笑うことが好き

本誌：このインタビューは、ひとつの作業に一生懸命取り組んでいる人をインタビューする企画です。てつおさんが、お笑い芸人になろうと思ったのはなぜですか？

てつお：ほんまに単純に言って、ずっとちっちゃい頃から一番好きやったのが「お笑い」やったからです。

本誌：それは、一番好きだったのが「人を笑かすこと」ということですか？

てつお：人を笑かすことも好きやけど、それ以上に「自分が笑うこと」が好きなんです。お笑いの番組見るのも好きやったし、友達と笑っているのも好きやったんです。で、僕って小さい頃から、めちゃめちゃ引っ込み思案やったんです。だから、人を笑かしたいけど、笑かせない、みたいな。せやけど、小学校5年の頃かなあ、段々引っ込み思案じゃなくなってきた、「あ、俺、ちゃんと人を笑かせられるやん」って思い始めた。中学校もそんな感じでいけたけど、高校入ってからみんなえらい笑いのレベルが高い、って思ったんです。

本誌：そうですね、高校の同級生やサッカー部は、皆、面白い連中ばかりでした。あと、サッカーは皆かなり上手かった。

てつお：そうなんです。みんなめちゃくちゃサッカー

が上手かった。だから、練習や試合ではエースストライカーになれなかったから、僕はお笑いでエースストライカーになろう、と。毎日、部活の帰りに、めっちゃ疲れてるのに、みんなで大喜利しながら帰ってたし。人を笑かすのも好きやったから、「ここでも俺は、トップ目指さなあかん」って思ったんですよ。

本誌：別に仕事でもないけど、日常生活でトップ目指そう！って思ったんですね。

てつお：そう、日常生活で「人を笑かす存在」でいたいなあと思ったんです。そんな時に、ふと気付いたんです。「俺って、異常にお笑いのこと好きやなあ」と。普通の人には、他人を笑かしたりするけど、それは日常生活で自然にさっさとやっただけ。僕は、なんか「お笑いのこと好きすぎてやん」って思った。

本誌：そうですね、高校の頃も笑いに関しては、いろんなこだわりがありましたよね。そういう自覚は高校の頃からあったんですか？

てつお：段々そんな自覚が出てきて、ほんで高校卒業して、予備校の頃、仕事について真剣に考えるようになった。その時に、いろんな好きなことはあるけど、一番好きなのは、やっぱり「お笑い」やなあ、と。大学受験のために勉強しているけど、やっぱりお笑いの世界に行きたいなって思ったんです。

本誌：予備校の頃から、そう思ってたんですね。

てつお：予備校の頃、吉本の漫才師「おかけんた・ゆうた」さんが、うちの予備校にラジオ番組の収録に来たことがあったんです。クイズ番組の収録やった。で、連れが「俺、この番組出るねん」って言ってきた。「お前、そんなん知ってたんやったら、俺に教えろや。俺、絶対出たい！」って思って、おかけんた・ゆうたさんに直談判して、「出さして下さい！」って言いに行っただけです。

本誌：直接、お願いに言ったんですね。事前にですか？

てつお：いや、来はってから。今から番組収録します、って時にお願ひしたんです。「ぼく、お笑い好きなんで出さしてもらえませんか！」って。そして、「そんな珍しい子おらへんから、いっぺんでてみるか」となって、出れた。で、そこでめっちゃうけて、「やっぱ、お笑い気持ちええわあ」っていう感じになって。大学に入ってから「お笑いの世界に行きたいわあ」っていつも思ってたんです。

本誌：大学入ってからは、お笑いやってたんですか。

てつお：大学では、お笑いやりたいてやつと知り合っ、て、「じゃあやろか」となって、オーディション受けにいったりしてた。で、何回かやって、「こいつとは合わへんなあ」となって別れて…次にサッカーサークルの後輩とコンビ組んでた。

自分を笑かしてくれる人はヒーロー

そんな存在になりたかった

本誌：そうやって聞くと、てつおさんのお笑いのルーツは、もう小学校の頃から「お笑いが好き」っていうのがあって、「人を笑かしたい」っていう気持ちがあるが、高校時代や予備校時代に育まれてきて、って感じですね。人を笑かすのもそうやけど、自分が笑うのが好きって聞いて、なるほどなあ。

てつお：人を笑かすのも好きやし、自分が笑うのも好きやから、自分を笑かしてくれる人が光ってるんですよ、僕の中で。自分を笑かしてくれる人はスター、いわゆるヒーローでした。漫才師とかドリフとか新喜劇の人とか。ほんまにみんな僕の中でヒーローでした。感謝すらしてました。で、当時の僕は、目立ちたいけど目立てへん、引っ込み思案な奴やった。でも、自分が人を笑かせるんや、目立てるんや、と思えるようになってから、「あ、自分もそんな存在になりたいなあ」と思うようになったんですよ。

本誌：お笑い芸人になったのは、人を笑かしたい、自分が目立ちたい、というだけでなく、そもそも「自分が笑うのが好き」っていう原点があったんですね。お笑い芸人の人はみんな、「目立ちたい」、「俺が笑かしたい」だけかと思っていましたが、そもそも「自分が笑うのが好き」、「自分を笑かしてくれる人が光ってみえる」とか「人を笑いという幸せな気持ちにしてあげたい」っていう、利他的な気持ちを感じました。

てつお：そうなんです、自分の中では人を笑かすのは「恩返し」なんですよ。ブラウン管から、舞台から、自分を笑かしてくれた人たちがいる。自分の幼少期や少年期に笑かしてくれた人たちがいた。同じように、今の子どもたちにも、昔の自分がそうやったように、笑かしてくれる人が必要やん、って思ってますよ。

本誌：そんなこと思ってたんですね。いつも思ってるんですか？

てつお：そう、いつも、今も思ってます。子どもが笑っている時こそ、「あ〜やってて良かったなあ」と感じる。勿論、大人に笑ってもらうのも嬉しいですけど。

本誌：お笑い業界全体のことも、そうやって考えるんですか。子供たちにとっても必要だ、とか。

てつお：まあ、そうですね。子どもたちにとって、もっと純粋に笑うことは必要な、と。あとは、自分が笑うのが好きだから、自分の好きなことを生業にしている、仕事にしている、って思いが強いんです。自分が好きなことじゃなかったら仕事にならんやん、と思うこともありますね。

本誌：自分がお笑い好きやんって、自覚あったのはいつ頃からですか。

てつお：小・中学校の頃からなんとなく思っていました。高校の頃、強烈に思うようになりました。サッカー部でカラオケいった時も歌わずにネタをやりました。「テレビでてる人より僕のほうがおもしろいやん」って思っていましたから。かなり、自信過剰でした。そう考えると、中学校の反抗期の頃、テレビに向かって反抗してましたね。

本誌：反抗期ってふつう、親とか先生に反抗しますが、テレビに向かって反抗してたと。

てつお：そう、いままで自分を笑かしてくれた人たちに、「俺のほうがおもしろいやろ！」って反抗していました。もちろん、感謝はしていましたが。

本誌：その感謝の念って、いう表現はすごいですよね。
てつお：笑かしてもらったら「ありがとうございました」と思っていました。テレビで、ドリフのコントみてる時、牢獄のコントでいかりや長介が看守をしている横に鍵がひっかかっている、みんなが牢屋に閉じ込められてるんですけど、棒か何かで鍵をこっそり取ろうとするんです。でも、志村けんの牢屋だけ鍵があいてて、加藤茶が鍵をとろうとするけど、おっこちるんです。それを、志村が牢屋を出て、わざわざ棒の先に鍵をひっかけて、また牢屋の中に戻ってくる。「いや、空いてるやん！」って心の中で突っ込んで…めっちゃめっちゃおもろいやないですか。「おもろいわ～ありがとうございます！」「また、つっこませてもらいました」って心の中でいつも思っていました。

本誌：心の中、自分のつっこむ声が聞こえるんですね。
てつお：そう、それも感謝の理由の一つですね。あとで気づいたんですけど、「おれ、笑いに気付いてつっこんでるやん」と。うちのおかんは隣で、「どこがおもろいねん」って言うてることあるんですけど、「俺にはわかる、おもろい！」って気付ける自分がいた。そう、気付かせてくれたことにも、感謝ですね。

想像力をかき立てる

本誌：高校の頃も、友人のボケに対して、てつおさんだけが笑っている場面、結構ありましたね。

てつお：そう、僕だけが笑っている、ボケに対して心の中でつっこめる、ボケに気付ける、これがいんですよ。だから、最近の若手芸人の丁寧すぎるコントとか見ると、「もっとケチでもいいのに、そこまで説明せんでもいいのになあ」って思うこともあります。子供の想像力をうばってるやん、と。

本誌：そんなこと考えてたんですね。仕事の話になりますが、お笑い芸人の仕事には、舞台にたったり、ロケにいったり、ネタつくったり、と色々あるかと思いますが、どの仕事が好きとか、大変とか、ありますか。

てつお：う～ん、そうですね。大変なのは「ネタづくり」ですね。笑い飯のネタはだいたい僕が書くんですけど、書いたネタを西田くんに見せて、彼が「やろう！」って言ったら採用やし、「いやや」って言ったらボツですね。で、最初は重箱で言うのと、おいしいネタやメインの料理を取り上げるん

ですけど、これだけやってると、もう美味しいのが残ってないんですよ。そうすると、重箱の隅のミートボールのかけらを拾ってネタにしたり、重箱のフタについてるご飯粒をふくらましてふくらまして、それをネタにしたり…これぞ笑い飯っていう。

本誌：うまいこといいますね。

てつお：こんなばっかりうまくなってくるんやね。

本誌：仕事の形はいろいろあると思いますが、自分が一番輝いてる、とか、アドレナリン一杯出てる、って思う時は、ありますか。どんな時ですか。

てつお：アドレナリンがめっちゃ出るのは、やっぱり相手が笑ってくれたときですね。それは、ロケだったら、視聴者の人というよりも、まずはスタッフが笑ってくれると、めっちゃ嬉しいですね。舞台に来てくれたお客さんやテレビの視聴者の人たちだけでなく、ロケの目の前のスタッフも、僕にとっては大事なお客さんやと思ってます。

本誌：笑ってくれる相手の人数ではなく、目の前の人が笑うかどうか、が大事なんですね。

てつお：そうですね。万人受けする笑いを求める人もいるけど、僕の場合は、分かってくれてる人だけが大笑いしてる、ってのも好きなんです。万人受けを求めている人からすると、それは「すべってるやん」ってなるけど、僕にとってはすべっているという感覚じゃなくて、「めっちゃうけたやん」となるんです。さっき言った、僕の子供の頃、自分だけが笑っている、というあの感覚がめっちゃ好きで、笑かしてくれた人に感謝してたから、分かる人だけが笑っている状況は、ほんまに好きですね。

本誌：笑い飯のネタって、そんな多いですよ。コアなファンはいるけど、理解できない人も多いっていう。

てつお：自分もそうやったからね。小さい頃、お笑いを聞いて、自分なりに解釈して笑ってましたから。想像力を養ってもらったっていう感覚で、リスペクトしてますね。ドリフや新喜劇の人たちには、

仏教が好き

本誌：また、話しは変わりますが、てつおさんが予備校生の頃、僕が当時はまっていた仏教の話をしたことがありますね。あの時、「仏教すごい」、「親鸞さん（注1）、すごい人やね」、「俺も教祖になりたい！」って言った記憶があり

ますが、覚えていますか。

てつお：もう、25年も前ですね。あの頃は単に「俺も親鸞さんくらい目立ちたい！」っていう思いもあったけど、僕、伝統とか古いものって好きなんですよ。親鸞さんも、師匠の法然さん（注2）の教えを大事に守って広めた人でしょ。伝統を大事にしてた人だと思ったんで、なんかよう分からんけど、すごい人なんやなあ、って感じたんだと思います。伝統を大事にしたいから、お笑いの世界に入った時も、コントじゃなくて漫才やろうって思いましたね。当時、コントがはやっていたんですけど、やっぱり漫才やんって思っていました。

本誌：伝統や古いものが好きっていうのは、何か影響を受けたものがあるんですか。

てつお：う～ん、やっぱり、じいちゃん、ばあちゃんから多大な影響は受けてますかね。小さい頃から田んぼの手伝いさせられたり、ええ話を聞かせてもらったり、両親が働いていたんで、じいちゃん、ばあちゃん子でしたね。あとは、家が奈良県の田舎の桜井市っていう、日本のまほろばとか万葉の故郷とか言われる歴史のある町なんで、お年寄りも多かったし、古いものが好きなんですよね、昔から。今でも田んぼや畑やってるし、風呂も大学までは薪で炊いてたし、生まれた頃はぼっこん便所やったしね。

本誌：高校のサッカー部の合宿で、みんなでてつおさんの家に行ったことありましたよね。

てつお：あの頃は、まだ風呂は薪で炊いてたね。古き良きものが好きっていうのは、昔から自分の中に、たしかにありますね。仏教が好きなのもそうかもしれないですね。

本誌：仏教関係の本を書いたりされていますけど（注3）、昔から仏教に興味があったんですか。

てつお：やっぱり、古き良きものが好きっていう発想があって、お寺さんや神社が好きってのは昔からなんとなくありました。それで、君から仏教の話聞いたときに、「仏教ってなんかすごいな、もっと調べたらおもしろいこと書いてあるかも」って思いましたね。で、仏教のことをいろいろ調べて勉強しました。般若心経の解説本を書いてくれって言われたこともあったけど、あの時は、現代人も、飛鳥時代の人も笑かしたい、と思って書きました。でも、アホなお

笑い芸人で売れたかったから、仏教好きはずっと内緒にしてたんでよ。仏教ってお堅いイメージじゃないですか。ぼくはいつも「幼卒です」って言ってたんで、仏教好きは隠したかったんです。

本誌：でも、本、書いてくれって言われたんですよね。

てつお：そう、吉本の人から仏教の本書いてくれって言われた。で、書いてみたら、思いの外、受けたんですよ。仏教はお笑いとしていいんですよ。お笑いですって言ってネタをしても、70点から75点になるくらい。こちょこちょされながら冗談言われてもすでに笑ってるし。でも、仏教の話ですって言いながら笑いをとれたら、0点から75点になるようなもので、そのふり幅がすごいんですよ。さっきまで、仏教とか真面目なお堅い話してたのに、ここで笑かすんか、こんなおもしろい人なんや、って。

本誌：仏教をネタにしてるんですね、お釈迦様、怒りますよ。

てつお：バチが当たるのを覚悟でやっています（笑）。伝統を守るためなら、少々バチあたってもしゃあないかな、って思っています。でも、真面目に仏教を学びたいなら、お寺さんとかよくわかっている人に聞いてください、って言ってますけどね。僕の話はあくまできっかけにすぎないですし。

お笑い、農業、仏教をつなぐもの

本誌：仏教以外にも、個人的に興味のあることって何かありますか。

てつお：僕は農家の生まれなんで、土いじりですね。今でもちょいちょい土いじりしてるんです。実家はずっと農家で、先祖代々の土地があって、それをじいちゃんや親父から譲り受けて、それを自分の代で終わらせたくない、やっぱり昔ながらの伝統は守っていきたくって思っています。で、隣の田んぼを「買ってくれへんか〜」って言われて買ったんです。最初は自分で買うつもりやったけど、じいちゃんに相談したら、「じゃあ、わしが買うたるわ」って言ってくれて、じいちゃんが田んぼをおごってくれました（笑）。そこで、後輩の芸人に田んぼや畑を手伝ってもらって、収穫できたら収穫祭と称して新嘗祭（にいなめさい：注4）って勝手に名付けて飲み会してるっていう、そんな感じですね。

本誌：芸人仲間と一緒にいろんなことやってるんですね。
こうやって、てつおさんのことを聞いていると、
芸人やって、田んぼや畑をやって…いろんな
やってはるんですね。

てつお：そうですね。だから、僕を表しているのは、
お笑い、農業、仏教ですかね。

本誌：てつおさんの存在を表す言葉を並べると…「お
笑い」、「農業」、「仏教」ですかね。芸人の
仕事をしながら、田んぼや畑もやっていて、仏
教の本を書いたり勉強したりしてますね。

てつお：そう、お笑い、農業、仏教…で、それを全
部包んでいるのが、「日本の神さん」ですか
ね。

本誌：日本の神さん？日本神話とか。

てつお：そう、笑いの原点は、日本の神さんですからね。
日本書紀や古事記にも出てきますけど、岩戸に
隠れたっていう、アメノウズメ（天細女命：注5）っ
ていう女の神さんが裸踊りをやったんですよ。そ
れが日本の一番最初のお笑いなんですよ。

本誌：神様が裸踊りをしたんですか。

てつお：そう、めちゃめちゃ面白い動きで、腰突き出し
て踊ったんです。それを見たみんなが笑いだし
たんですけど、隠れていた天照大神（アマテラ
スオオミカミ）が「なになに、何してんの？楽し
そうな声して」って出てきて…それによって世の
中に、光がもたされたという…。

本誌：そんな話があるんですね。それがお笑いの原点
だと。

てつお：そう。お笑いの原点は神様なんです。で、農
業も先ほど話した収穫祭って神様にお祈りしたり
するんです。仏教については、もともと日本は
神の国でしたけど、聖徳太子の時代に、仏教
が入ってきて「仏教で国をまとめたらうまいこと
くやん」ってなって浸透しましたが、しばらくし
て、本地垂迹（ほんじすいじゃく：注6）って
いう考え方が出てきて、「日本の神様はもともと仏
さんが姿を変えたものだ」という説が出てきて…。

本誌：良く知ってますね。仏教学者さんみたいですね。

てつお：いろいろ勉強しましたからね。で、明治時代に、
神仏分離令（注7）が出るまでは、日本では神
も仏も同一視されて一緒だったですよ。そうやっ
て考えると、仏教も神さんに通じているところ
がある。

本誌：てつおさんを表す、お笑い、農業、仏教に共
通しているのが日本の神様ってのは、面白いで

すね。

てつお：さっきも話しましたが、奈良の田舎に生まれて、
僕にとって日本の神さんってのは馴染みがあるっ
ていうか、生まれた頃から、影響を受けてるん
ですかね。伝統とか古きよきものが好きって
いうのも、同じような感覚ですね。

本誌：てつおさんに馴染みの深い作業が、お笑い、
農業、仏教の本を書くというのがあって、それ
らに通じるのが日本の神様っていうのは、万葉
の故郷である桜井市に生まれたゆえんであり、
おじいさんやおばあさんに育てられた環境の影
響で、古き良きものを大切にされているんです
ね。

てつお：まあ、祖父母の影響は強いでしょうね。いろん
なことやりたいなっていうのは、単に目立ちたが
りの欲張りなんでしょうね。何足の草鞋はいてん
ねん、って感じですけど。

本誌：最後に聞きたいんですけど、仕事でつらいこ
とも沢山あったと思いますが、てつおさん
にお笑い芸人をこうして続けさせたものって何
だったと思いますか。

てつお：くさい言い方ですけど、やっぱり人の笑い声で
すね。人の笑う声を聞きたい。で、そのやり
たかったことを仕事にできている、っていう思
いは僕にとって大事にしていることですね。昔
の手帳みたら、「バイト、バイト、バイト」です
けど（笑）、今はお笑いの仕事をやらしてもら
えている。やりたかったことを仕事にでき
ている、これはやっぱり最高ですわ。で、M-1
グランプリで優勝した時（2010年）もそうす
けど、売れていない頃も、あまりテレビに出
ない今でも（笑）、日本一おもしろいって思
っています。日本一＝世界一おもしろいって
ことですね。アメリカなんかでも、お笑い
芸人って仕事はありますけど、日本みたい
に一方的に笑かす感じではなく、みんな
で一緒に笑うって感じなんです。だから、
日本のようなお笑い文化は世界には
なく、日本は世界一だと思っています。

本誌：好きなことを仕事にできているって気持ちを、
いつも大事にされているんですね。そうい
う気持ちで、仕事をやっていると、忙
しい時やつらい時は、ついつい忘れてしま
いがちですが。

てつお：好きなことが生業になっているって感覚は、僕
の中ではかなり強くて、それが今でもお
笑いの仕事を続けられているって感じ
ですね。

本誌：てつおさんの話を聞いて、私の学生時代の先生が「作業療法士や理学療法士に向いている人ってどんな人か分かるか」って僕らに聞いてきたのを思い出しました。その先生が「向いている人っていうのは、作業療法士や理学療法士になりたいって気持ちの強い人なんだ」と言っていましたね。技術や人柄なんていうのは後からついてくるんだ、と。お笑い芸人でも、どんな仕事でも、自分の好きなことを仕事にできるっていうのは最高ですね。

てつお：ほんまにそう思います。

本誌：今日は本当にありがとうございました。

- (注1) 親鸞(しんらん)は鎌倉時代前半から中期にかけての日本の僧侶。浄土真宗の宗祖とされる。(Wikipediaより引用。2018年10月4日アクセス)
- (注2) 法然(ほうねん)は平安時代末期から鎌倉時代初期の日本の僧。浄土宗の開祖と仰がれた。親鸞の師匠。(Wikipediaより引用。2018年10月14日アクセス)
- (注3)「ブッダも笑う仏教のはなし」(サンマーク出版)、「えてこでもわかる笑い飯哲夫訳般若心経」(ヨシモト

ブックス) など

- (注4) 新嘗祭(にいなめさい)：宮中祭祀の一つ。収穫祭にあたるもので11月23日に、天皇が五穀の新穀を天神地祇(天と地の神々)に勧め、また自らもこれを食べ、その年の収穫に感謝する行事。(Wikipediaより引用。2018年9月9日アクセス)
- (注5) 天細女命(アメノウズメ)：日本神話に登場する神。「岩戸隠れ」の伝説などに登場する芸能の女神であり、日本最古の踊り子と言える。(Wikipediaより引用。2018年9月9日アクセス)
- (注6) 本地垂迹：仏教が興隆した時代に発生した神仏習合思想の一つで、日本の八百万の神々は、実は様々な仏が化身として日本の地に現れた権現であるとする考え。(Wikipediaより引用。2018年9月9日アクセス)
- (注7) 神仏分離令：神仏習合の慣習を禁止し、神道と仏教、神と仏、神社と寺院とをハッキリ区別させることで、明治新政府により1868年、全国的に公的に出された。(Wikipediaより引用。2018年9月9日アクセス)

<インタビューを終えて>

高校の頃はてつおさんに対して、「ちょっと変わった人を笑わせるのが好きな同級生」くらいに感じていましたが、インタビューを終えて、彼を形づくる作業に、お笑いや農業、仏教の本を書く、等があることが分かり、それらに共通するのが日本の神様だという彼の気付きを聞いて、なるほどと思いました。彼は奈良県の田舎の生まれで、祖父母や田舎の環境を大事にするような発言が多く、古きよきものを大切に人間だと高校の頃から接していましたが、それが彼の作業の根底を流れているように感じられました。お笑いについては、高校の頃から彼は人一倍目立ちたがり、他人と違ったことをするのが好む人間でした。インタビューの数か月後に聞いた幼い頃のエピソードでは、小学校3年の頃、テレビで流行っているギャグをマネして教室で笑いをとっているクラスメートに違和感を覚えたそうです。クラスのレクリエーションの出し物では、自分のグループが日本昔話の替え歌で「ぼうや〜、良い子だ、金出しな」と歌うことが決まった時は、テレビの真似をするのはとても嫌だったそうです。この頃から、独創的な笑いに価値を見出しており、人と同じことをするのは嫌だ、という感覚は、幼い頃から彼の中にあり、それがお笑いのネタにも通じていると分かりました。TVでも一般受けしないネタを平気で続け一部の人を笑わせたり、興味のないアイドルにはコメントしない姿勢は、幼い頃から彼の中に根付いている信念だと感じました。中学の頃には、授業中に紙に変なことを書いて隣の友達に見せて笑わせる、という遊びに夢中だったそうです。彼が書いた内容をみた友達が、授業中に嘔き出して笑ってしまい先生に叱られるのを見ては、相手を笑わせることへの有能感が生まれ、そのような経験を重ねて、お笑いを仕事にするまでに至ったのでは、と思いました。



久しぶりの再会を楽しむ

(中塚 聡 諏訪共立病院)